二〇二六年度　国語　問題用紙

一　次の文章を読み、問いに答えなさい。

なお、問いは **問題用紙** No. 3 にあります。

十代、二十代の頃の僕にとって、古書店は特別な場所だった。大袈裟ではなく一日に何軒も古書店を［　①　］して、どの街のどの店のどの棚にどのような本があるか、誰にも頼まれていないのに勝手に把握していた。

当時の若かった僕は、古本といえども簡単に本を買うことなんてできなかったから、「あの本は売れてしまったのか」「新しい本が入っているな」と毎日のように書棚を眺めながら②［　　］喜［　　］憂し、真剣に本と向き合っていた。

知らない街を散歩していても古書店があれば必ず入った。③素通りしたことなんて一度もない。遅刻しそうな時でさえも一応は店のなかに入り、ざっと④背表紙を追った。時間がない時に、神社の鳥居の前で簡単に頭を下げるだけになってしまうことはあったが、古書店だけは素通りできなかった。義務でもなんでもなく、古書店の看板を見つけるだけで胸が高鳴ったのだ。深夜でシャッターが閉まっていた時は、後日開店している時間に再訪した。

昼間は、新刊が置いてある大型書店にもよく通った。だが、⑤午後八時を過ぎると急に行く場所がなくなり、夜に放り出されてしまう。時間が有り余っていた自分にとって、古書店と自動販売機だけが、自分を何者かにしてくれる装置として、機能していたのだ。缶珈琲を持っていると僕は珈琲を飲んでいる人になれたし、古書店で本の背表紙を眺めていると、本を選ぶ人にもこれから本を読む人にもなることができた。

一日なにもやることがなくて、ようやく夜中に歩き始めることもよくあった。深夜まで開いている古書店を目指して歩く。当時、住んでいた三鷹や吉祥寺には遅くまでやっている古書店が沢山あったので、それを一軒ずつ廻っているだけで数時間を過ごすことができた。あの頃の僕は片手に缶珈琲を持ち、古書店を目指して歩く⑥妖怪だった。

毎日、古書店を廻り書棚に並ぶ背表紙を追い続ける生活を送るとどんなことが起こるかというと、店に入らなくてもその外観や外のワゴンに並ぶ本を確認しただけで、大体どのような本が店にあるのか分かるようになった。太宰治、芥川龍之介があるから近代文学が中心なのだろう、というようなことではなく、訓練によって得た霊感に近い。この店には自分が買わなくてはいけない本があるとか、素敵な古本屋さんだが自分が買うものはなさそうだということが、直感で分かるようになった。

例えば、背表紙の色で出版社が分かるので、各出版社の並びが頭に入っていたりもするのだけれど、俯瞰で書棚全体を見渡せば、大体僕が求めている本があるかないか、またどこにあるのかが分かるようになった。もっと言うと、僕が読むべき本は光を放っているように見えた。ふざけているわけではなくて、引き寄せられるように本が居場所を教えてくれるような感覚があったのだ。

「読めるかな？　難しそうやけど……」と不安になる僕に棚の本達が、古書店全体が、「絶対読むべきだよ」と教えてくれる。

そして導かれる［　a　］に読んでみると、「ああ、この本は今じゃないと駄目だった。少し前でも、少し後でも駄目だった」と読み終えた表紙に視線を落としながら感動したことが幾度もあった。誰かに薦められたわけでもないのに、最高の案内人が選んでくれたかのような僕の生活との奇跡的な符合があることも少なくなかった。

本に裏切られたことがない僕にとって、本のことを嫌いになる理由［　b　］なかった。こんなにも優しい友達は僕にはいなかった。本に書かれていることを読みながら自分勝手になにかを感じてもいいし、どれだけ僕が長い感想を頭のなかで述べても本はずっと待ってくれた。再読して感想を覆したとしても、本は僕を咎め［　c　］しなかった。

だからこそ、誰かが本のことを悪く言うのは聞いていて苦しかった。唯一、⑦お互いに対しての温度が一致している重要な友達のことを、悪く言われているような気持ちになってしまうのだ。

「本じゃなくて、おまえがおもろないんやろ？　本の話をよく聞いたか？　読み始める前日はちゃんとワクワクしたか？　体調は整えたんか？　おまえが好きじゃなかったら本も調子出えへんやろ。金払って買ったから⑧主［　　］関係にあるとでも思ってんのか？　おまえと旅行に行く本が可哀想やわ。楽しくないやろな」などと本気で思っていた。

大人になって思い返すと、世界のどこにも突然変異のように生まれた小説なんてものはない。必ず「文芸」という世界地図のどこかにその本はある。⑨大陸から離れた孤島であったとしても、その本が暑いのか寒いのかくらいは見当がつく海に浮かんでいるはずだ。それなら、読めば読むほどあらゆる物語と物語が繋がっていくなんてことは不思議ではない。

若かった僕は知らないことだらけだったので、強く刺激を受けただろうし、本来読書が持つ価値を大きく超えた感動を得ることができたという単純な話なのかも知れないけれど、なにかそれ以上の特別な力が働いていたような気がしてならない。

そんな僕が、書店を恐ろしく感じるようになったのはいつからだろうか。あんなにも僕を助けてくれた友達に会えなくなってしまうなんて。こんなに哀しいことはない。僕が小説を書き始めてから、しばらく書店に行けない時期があった。書店で購入することにこだわっていた僕がネットで本を買うようになった。全国には書店がない街もあるわけだし、ネットのおかげで本が読める人がいるということは素晴らしいことなので、そのシステムを否定しているわけではない。書店に行くのが怖くなった僕には欠かせないものでもある。ただ、あんなにも書店を好きだった僕がこんなことになるなんて、全く予想できなかった。書店が恐ろしくなった理由は、僕が小説を発表したことに対する一部の文学者の反応に失望したことが大きい。あらゆる書き手が存在して良いはずだと信じていたが、僕の作品は内容ではなく、「芸人が小説を書いた」という側面だけで語られることが多かった。本来は、性別や年齢や国籍や職業などあらゆる事柄が、差別されることなく平等であるべきだということに、価値を置いていたはずの言論の人達が、露骨に「芸人が書いた小説」という文脈だけを切り取って語ろうとした。どのような職歴の者が書いても良かったのではないのか。平等を唱えていたのは、信念ではなく形式だったのか。それでは、「今の時代、差別は駄目」と言っている低俗な輩と同じではないか。差別はいつでも駄目なんだよ。

これが例えば⑩ワイドショーの司会者に言われたのなら、感じ方は異なる。実際に、「芸人の癖に作家気取りですよ」というニュアンスの発言を番組でされたこともあった。この言葉の裏には、「職業には貴賤があり、芸人は小説家よりも劣るので、小説を書いた芸人は嬉しくて作家を気取るはずだ」という過剰な思い込みがある。そもそも、この時期に発表した小説『火花』には、語り手の笑いに対する想いを執拗に書き込んでいるので、作品を読んでさえいれば、そのような発言には至らなかったはずだ。

『火花』には次のような場面がある。芸人であることに*矜持を持つ徳永に対して、事務所の社員から「徳永君、大阪選抜だったんでしょ？　なんでサッカー辞めちゃったの？」と見当違いな質問が投げられる。徳永は、「この人にとって、僕などはここに存在していなくても別に構わないのだ。どこかでサッカー選手にでもなっていたら、こいつは幸せだっただろうと⑪軽薄に想像する程度の人間でしかないのだ。そして、それはこの人に限ったことではない」と考える。物語にあった浅はかな質問と同じ思考が、ワイドショーで披露されただけのことだ。ありがちな偏見として小説に書き込んでいるくらいだから、本質を捉えようとせず、表層で遊ぶことをエンタメ化する場で繰り返されたとしても残念ではあるが、驚きはしない。

しかし、文学者が排他的な思想を持っていたことには、少なからず動揺した。それは、文学に幻想を抱いていたからだ。かつては憧れに似た感覚で書店の本棚を見上げていたが、その棚に排他主義者が隠れているのかと思うと吐きそうになる。そんな鈍い感性の書き手は一部に過ぎないのだろうけれど、書店が恐ろしくなったというのは事実だ。

（本文は、問題用紙 No. 3 に続きます）

二〇二六年度　国語　問題用紙

二

次の文章は、筆者が家族とともに疎開先の青森県で送った、戦後の生活について述べた部分です。これを読み、問いに答えなさい。

なお、問いは **問題用紙** No. 4 にあります。

ある日、私たちは、駅で待ちくたびれて、退屈していた。その時、ふと、同じ*諏訪ノ平から通ってる友達と、アヤトリしたいね、という話になった。紐…紐…と探してるうちに、私の首から下げてる*定期の紐が、丁度いい長さだ、という事になり、私は首から紐をはずし、定期入れの穴から抜いた。定期は厳重にランドセルにしまった。私たちは、アヤトリに熱中した。私たちは、カエルだの鉄橋だの、①いろんな難かしいのが出来た。頭には、シラミが、たかっていたし、洋服も、従姉から貰ったセーラー服に、母が東京の家から、どういう訳か疎開する時、風呂敷がわりに持って来た茶色のゴブラン織りのカーテンで作ってくれたゴワゴワのズボンを、はいていた。それ一揃いしか、私は洋服というものを、持っていなかった。それでも、アヤトリをしている時は楽しかった。やっと汽車が来た。改札の所で定期を出した私は、一駅のことだからと、定期入れを口にくわえて、揺れる汽車の中で、アヤトリをした。一駅、といっても、東北線の一駅だから、かなり、アヤトリは、出来た。私たちは諏訪ノ平で降りた。私は改札口で定期を見せ、手に持って、その友達と話しながら歩いた。私の家の、ちょっと先に橋があり、その友達は、橋を渡って、［ア］少し奥のほうに行くのだった。私は家に行く小道の所で別れようと思ったけど、なんとなく別れにくい気持になり、橋の所まで、一緒に歩いて行った。その、②橋のたもとの所で、私たちは、さよならを、いった。

「アヤトリ、楽しかったね。じゃ、また明日！」

③私は手を振った。友達も、橋の途中で振り返って手を振った。私は、前より、もっと大きく手を振った。その時、私の手から、ハラハラと何かが落ちて飛び、川の中に落ちた。はじめは、

「なんだべ？」

という感じだったけど、［イ］、それは定期だった、と私に分かった。私は必死に走って、川べりに行った。私の定期入れは、川の表面にチラリと見えたけど、瞬間的に川の流れの中に、もぐってしまった。大きい川の流れは早かった。少しずつ、辺りは暗くなり始めていて、どんなに追いかけても、［ウ］無駄、と、［エ］分かった。洪水の時、大きな材木が、あっという間に姿を消して流れて行ったのを見た事があった私は、④川の恐ろしさを、知っていた。

私は、母が編んでくれた紐を、出して見た。どんなに後悔しても、［オ］遅かった。

（⑤お母様に、何といおう……）

その時の私たちの家は、家といっても、リンゴ畠の真中にある、小さな見張り小屋のようなものだった。水は近くにポンプの井戸があったけれど、電気は無くてランプだったし、御飯の支度は、私たちが拾って来たタキギだった。それでも、私たちにとっては、楽しい我が家だった。その家に、私は、どうやって帰ったか、ほとんど覚えていないくらいユーウツになって帰った。

私の母は、そういう時、絶対に、グズグズいうタイプの人では、なかった。

「だから、いったじゃないの！」と、私を責める事も、しなかった。

「失くしちゃったんだもの、仕方ないじゃない」と、いっただけだった。

⑥だから私は、余計に、自分の馬鹿さ加減を思い知るのだった。

次の朝、母は駅の人と交渉してくれた。でも、「どんなことがあっても再発行はしない」という規則になっていたので、その月は、［カ］、私は定期なしに、学校に通うことに、なった。運が悪いことに、それが月初めの事だったので、次の月の定期が買える日まで、一ヶ月近くあった。

結局、母には叱られなくても、私は自分の不注意から、一緒に通う友達より、二時間近く早く家を出て、歩いて、隣りの*三戸の駅まで行くことになったのだった。

普通の道を歩いて行くと大回りで、何時間かかるか分からないので、線路の上を歩いて行くことにした。それだと一時間半くらいで行ける、という駅の人の話だったので、私は、そうする事にした。

次の日から私は、まだ暗いうちに家を出た。ひとつだけ運が良かったのは、寒い季節じゃない、という事だった。その頃、私たちは、みんな履きものが無く、やっと分けて貰った下駄をはいて、学校に通っていた。枕木の上を、カランコロンと音をさせながら、私は急いだ。とにかく、友達の乗っている（つまり、いつもなら私も乗っているはずの）汽車の着く前に、三戸の駅に着いていよう。そこで待っていて、一緒に学校まで、行くんだ。学校までは、バスと歩きで、かなりの距離だったから、汽車通学の生徒は、一緒に行動することに、なっていた。行きは、それでも、1一気呵成に家を出て来るので良かったけど、つらいのは、帰りだった。学校から駅まで、みんなと行くと、みんなは、汽車に乗る。

「じゃ、また明日！」

と、元気を出して、みんなを見送ってから、一人で、カランコロンと、枕木の上を、飛びはねながら、汽車の通って行った後を、歩いて行くのだった。この時は、少し寂しかった。

帰りは、途中まで行くと、日が暮れかかって来た。線路のまわりは、だいたい田圃とか、リンゴ畠だけど、こわい、という事は、なかった。［Ⅰ］、普段、見たことのない風景が見られて、結構、面白かった。

でも、一度だけ恐ろしいことが、あった。

毎日、そうやって歩いていると、どの辺りまで歩いた時に、「下り」が一回通り……とか、いうように、汽車のスケジュールが、私にも、はっきり分かって来た。汽車が通過する時は、線路から外に出て、土手に立って過させてから、また呑気に、枕木の上を歩いて行った。

ところが、ある日、諏訪ノ平の手前で、私が鉄橋の上を歩いている時に、前の岩陰から、突然、ボーッ!!　と汽車が姿を現した。これは、スケジュールにない臨時の、ものだった。その鉄橋は、うんと流れの激しい川の上にあった。［Ⅱ］、その時、線路工事の人なんかが汽車をよけるための柵のついた出っぱりが、壊れていたため、取りはずして、あった。うしろに戻るには、もう遅すぎた。前からは汽車、川に飛びこむには、鉄橋が高すぎる。私は、2立往生の形になった。私は、枕木の間から下を見た。川は音をたてていた。［Ⅲ］、⑦それしか、なかった。私は、ランドセルを背負ったまま、枕木に、ぶら下った。その途端、頭の上を汽車が通り始めた。臨時の汽車だから、一体、何輛くらいあるのか、私には、分からなかった。よほど長い連結らしく、いつまでも、いつまでも、頭の上を、音をたてて、のんびりと走って行く。私は鉄棒は上手ではなかったけれど、小学生の時、自分で考えた「牛肉さがり」という、いつまでも片手で鉄棒にぶら下って、お肉になっている、というのが得意だったのが、よかったのかも知れない。とにかく私は、汽車が全部、走り去った音を確かめてから、上にあがろうとした。この時が、一番、こわかった。ぶら下っている時は、なんとか持ちこたえたけれど、体を持ち上げる力が、もう、なかった。ランドセルも邪魔だった。でも、私は、3ガムシャラに、足を使ったり、アゴを使ったりして、とうとう、枕木の上に、あがった。

しばらくは、ふるえていて歩けなかった。

やっと定期が買える時が来て、母が買ってくれた。私は、いそいで、紐を通して、しっかりと首にかけた。

⑧私はいま、いろんなネックレスを持っている。でも、あの母の作ってくれた、混り毛糸で編んだ茶色の紐ほど、思い出深いものは、ない。

（黒柳徹子『トットの欠落帖』新潮文庫）

【注】

＊諏訪ノ平・三戸…ともに、当時青森県を走っていた鉄道・東北線の駅名。

＊定期…定期乗車券。一定の期間、一定の区間を何回でも乗車できる電車・バスなどの割引乗車券。

（問題用紙　No. 1　一の本文　続き）

かつて、真夜中の古書店の灯りに照らされた僕はどんな表情をしていただろう。本に囲まれて背表紙を追っていた僕の感情はどうだっただろう。本棚から一冊だけを大切に抜き取った僕の手はどうだったか。その本をアパートに持ち帰り、ページを開く時の高揚感を想い出すと哀しくなる。本に申し訳ない気持ちになる。もう、あの頃のようには本を愛せなくなってしまった。⑫本が悪いわけではなく、僕が変わってしまったのだろう。

……（後略）……

（又吉直樹『月と散文』ＫＡＤＯＫＡＷＡ）

【注】

＊矜持…ほこり。プライド。

問一　□①にふさわしい語を次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア　だんご　　イ　はしご　　ウ　ふたご　　エ　まいご

問二　――線部②「□喜□憂」の空らんには、同じ漢字が入ります。それを答えなさい。

問三　――線部③「素通りした」を、わかりやすく言いかえて答えなさい。

問四　――線部④「背表紙を追った」とありますが、何をしたのか、「背表紙」に続く形で、わかりやすく言いかえて答えなさい。

問五　――線部⑤「午後八時を過ぎると急に行く場所がなくなり」とありますが、その理由を答えなさい。

問六　――線部⑥「妖怪」とありますが、なぜこのように言っているのか、説明しなさい。

問七　□a～cにふさわしい語を次のア～オから一つずつ選び、それぞれ記号で答えなさい。ただし、同じ記号は一度しか使えません。

ア　しか
イ　たり
ウ　など
エ　のみ
オ　まま

問八　――線部⑦「お互いに対しての温度が一致している」とありますが、ここではどういうことを言っているのか、説明しなさい。

問九　――線部⑧「主□」の空らんには、「主」の対義語が入ります。漢字一字で答えなさい。

問十　――線部⑨「大陸から離れた孤島」が指しているものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア　文芸の世界では、主流ではない本。
イ　文芸の書棚では、手に取られない本。
ウ　文芸の発達していない島で書かれた本。
エ　文芸の書棚のはしに、ぽつんと置かれた本。

問十一　――線部⑩「ワイドショー」を、筆者はどういうものだと言っているのか、最後に「もの」が続くように、本文中から三〇字以内で探し、最初と最後の三字を答えなさい。

問十二　――線部⑪「軽薄に想像する」とありますが、ここでの「軽薄な「想像」はどういう考え方にもとづいて生まれたものなのか、具体的に答えなさい。

問十三　――線部⑫「本が悪いわけではなく、僕が変わってしまったのだろう」とはどういうことを言っているのか、説明しなさい。

問十四　――線部⑫のあと、筆者は、本に対する自らの今後の姿勢を、改めて述べます。どういうことを述べていると思うか、書きなさい。そう思う理由も書くこと。

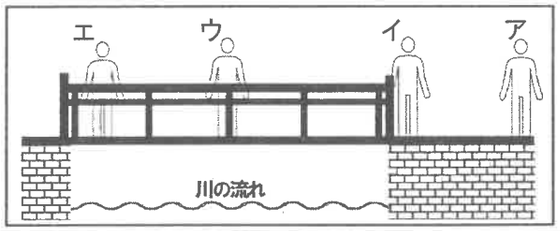
二の問題はこの裏にあります。

二　（本文は問題用紙 No.2 にあります）

問一　――線部①「いろんな難かしいのが出来た」とありますが、「難かしいの」とは何のことを言っているのか、わかりやすく答えなさい。

問二　□ア～カには、「もう」か「すぐ」のどちらかが入ります。「すぐ」が入るものをすべて選び、記号で答えなさい。

問三　――線部②「橋のたもと」として最もふさわしい場所を下の図のア～エから選び、記号で答えなさい。



問四　――線部③「私は手を振った」とありますが、次のA～Fのうち、ここまでの部分で筆者が行っていることを四つ選んで順序どおりに並べかえ、記号で答えなさい。なお、その四つの後には「定期を手に持つ」が続きます。

A　定期の紐をつける
B　定期の紐をはずす
C　定期をランドセルから出す
D　定期をランドセルにしまう
E　定期を口にくわえる
F　定期を落とす

問五　――線部④「川の恐ろしさ」とはどういうことを指して言っているのか、洪水の時と今回と、両方に当てはまるように説明しなさい。

問六　――線部⑤「お母様に、何といおう……」とありますが、このときの「私」の気持ちを説明しなさい。

問七　――線部⑥「だから私は、余計に、自分の馬鹿さ加減を思い知るのだった」とありますが、このときの「私」の気持ちの説明として最もふさわしいものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア　定期をなくしたことを母はなぐさめてくれたのに、その一方で、なくしたことをグズグズとくやみ続ける自分が情けなくなっている。
イ　貧しい暮らしの中で、母が買ってくれた定期はとても高価だったのに、その価値も知らないで、大事にしなかったことをくやんでいる。
ウ　川の恐ろしさは母に日ごろから言い聞かせられていたのに、そこで手を振って定期を落とすという自分の忘れっぽさを痛感している。
エ　自分の失態でとんでもないことになったのに、母に責められさえしなかったことで、かえって自分の不注意さを身にしみて感じている。

問八　――線部1～3の意味を次のア～エから一つずつ選び、それぞれ記号で答えなさい。

1「一気呵成」
ア　がまんして物事を終わらせること。
イ　物事をひといきにやってしまうこと。
ウ　物事に集中してじっくり取り組むこと。
エ　一つの物事をみんなで成しとげること。

2「立往生」
ア　じっと立ったままあれこれ考えること。
イ　不意のできごとに右往左往すること。
ウ　途中で止まったまま動けなくなること。
エ　捨て身の姿勢でいどもうとすること。

3「ガムシャラに」
ア　あとさき考えず強引に
イ　むしゃくしゃして
ウ　興奮にふるえながら
エ　勇気をふりしぼって

問九　【　】Ⅰ～Ⅲにふさわしい語を、次のア～オから一つずつ選び、それぞれ記号で答えなさい。ただし、同じ記号は一度しか使えません。

ア　しかも
イ　だから
ウ　でも
エ　まるで
オ　むしろ

問十　――線部⑦「それしか、なかった」とはどういうことを言っているのか、説明しなさい。

問十一　――線部⑧「私はいま、……思い出深いものは、ない」についての最もふさわしい説明を次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア　アヤトリの紐でさえ、ありあわせの毛糸で作らざるをえなかったほど物がとぼしかったのだ、と、ときどき茶色の紐を取り出しては、疎開先の青森での日々をなつかしく思い出している。
イ　茶色の紐は、見るたびに、かつての恐ろしい体験を思い出させるものであり、失敗を引き起こした自分のそそっかしさをいましめるために、ほかのネックレスよりも大切に保管している。
ウ　母の思いやりのこもった茶色の紐をめぐる、子どものころの強烈な体験は、今もなおあざやかに思い出され、どんなネックレスよりもこの紐が印象深く筆者の心に刻みつけられている。
エ　きらびやかなネックレスの似合う大人になった今、仲良しの友達とアヤトリをして過ごした、幼い日のあどけない自分を思い出すものとして、この茶色の紐を大切にしたいと思っている。

三　漢字の問題は解答用紙にあります。